〈青森県史〉の窓 59

歴史に見る「温泉」④
江戸時代の温泉番付

中野渡　一耕
（県民生活文化課　県史編さんグループ　主幹）

庶民文化が花開いた江戸時代後期、相撲の番付に見立てて、名所旧跡、神社仏閣、特産物等々をランク付けて紹介する「見立て番付」が流行した。特に文化・文政期（1804～29）以後が多く、江戸や大坂で刊行され、木版摺りで全国に流布された。そのひとつとして、諸国の著名な温泉とその効能を紹介する「諸国温泉効能鑑（しょこくおんせんこうのうかがみ）」という番付があるので紹介する。

交通や情報の発達とともに、効能を求めて長期湯治に行く人々が増加したのは勿論、旅行の途中で1、2泊する「観光入浴」と言うべきものも見られるようになったことが刊行の背景としてあげられよう。

この番付は刊行年や刊行場所は不明で、いくつかのバリエーションはあるが、掲載されている温泉はほぼ共通している。全国90カ所の温泉が挙げられており、比較的東日本の温泉が多い。勧進元は「紀州熊野本宮の湯」、差配人は「新宮の湯」（いずれも現和歌山県湯崎温泉）で、熊野信仰との関連が伺える。最高位の大関（当時は横綱は無かった）は「上州草津の湯」（群馬県）と「摂州有馬の湯」（兵庫県）。言わずと知れた日本を代表する温泉である。

現在の青森県内にある温泉が8カ所もある。この他「津軽大鰐の湯」が行事の一人？として、名前を連ねているのが注目される。なぜ大鰐温泉がこの地位を占めているのか、興味深い。

8カ所の温泉とその効能は次のとおり。

○東前頭8枚目：津軽嶽の湯「瘡どくうちミによし」
○同14枚目：南部恐山湯「諸病ニよし」
○同26枚目：津軽温湯ノ泉「しやくつかえ」
○同33枚目：津軽板留湯「諸病ニよし」
○同42枚目：南部麻水ノ湯「づつうニよし」
○西前頭30枚目：津軽矢立の湯「切りきず　さうとく」
○同33枚目：津軽浅虫湯「せんきニよし」
○同41枚目：津軽倉立湯「諸病ニ妙」

このほか、現青森県域ではないが、南部領の温泉として、「南部鹿角湯」（秋田県鹿角市）と、「南部台の湯」（岩手県花巻市）の2カ所が上げられている。

嶽の湯（弘前市）と矢立湯（青森・秋田県境）の効能にある「さうとく（瘡毒（そうどく））」とは梅毒のこと。温湯（黒石市）の「しゃく（癪）」とは時代劇でおなじみ？の病名だが、胸部や腹部におきる激痛のことを総称した。浅虫湯（青森市）の「せんき（疝気）」とは下腹部内臓が痛む病気のこと。南部恐山湯（むつ市）と、倉立湯（大鰐町蔵舘。現在は大鰐温泉の一部）は「諸病によし」と高い評価である。

ここに掲げられている温泉は今でも青森県を代表する温泉地が多いが、「南部麻水ノ湯」だけが不明である。浅水（あさみず）という地名は五戸町にあるが、現在はもちろん、江戸後期の盛岡藩の地誌を見ても、該当する温泉は無い。この温泉番付自体、どの程度現地の情報を反映しているか不明であるが、誰か詳しい場所を知る方、この場を借りてご教示願うものである。

諸国温泉効能鑑
（青木美智男編『決定版　番付集成』柏書房　より転載）